

〔行事記録〕

第50回シンポジウム

「ホッブズのローマ：タキトゥスとマキアヴェッリの間で」

日時：2015年9月26日（土）14：00～17：00

会場：関西大学千里山キャンパス 児島惟謙館第1会議室

司会・通訳：安武 真隆（関西大学政策創造学部教授）

報告：ダニエラ・コーリ（フィレンツェ大学教授）

討論：木村 俊道氏（九州大学法学研究院教授）

通訳：石黒 盛久（金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授）

*以下は、2015年9月に開催された第50回シンポジウムの記録である。コーリ教授は、シンポジウム当日、英語版の読み上げ原稿に基づき英語で報告し、これを石黒教授が（事前にイタリア語版の原稿に基づいて準備した日本語訳を基礎に）通訳した。この記録では、コーリ教授の報告について、石黒教授の日本語訳を基礎に、安武が英語版の原稿と当日の音声記録を照合し（報告原稿のイタリア語版にのみ記載のある表現・記述については鍵括弧を付した）、討論の部分についてはコーリ教授によるシンポ後の大幅な加筆修正をも踏まえて、日本語訳を作成した（一部の加筆については注に回した）。討論者の木村教授のコメント報告は英語でなされたが、本記録では、当日配布資料として用意された日本語版に基づく。

なお、コーリ教授の報告に関連するものとしては、石黒教授が翻訳された「ホッブズのローマ：タキトゥスとマキアヴェッリの間で」「ホッブズとマキアヴェッリにとっての武力と法」（コーリ教授の著作『スチュアート朝イングランドとホッブズ・ローマ・マキアヴェッリ』Daniela Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart*, Le Lettere, 2009の第8章と第9章）が、『世界史研究論叢』の第5号（2015年）と第6号（2016年）に掲載されている。また木村教授の英文コメントは、本行事記録に関連する論説として、若干の加筆修正を経て本号に掲載されるが、既にその一端は、政治思想学会会報（JCSPT Newsletter）の第41号（2015年12月）に「ホッブズのローマ、もしくは人文主義と帝国— Daniela Coli, *Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart* をめぐって」と題して、日本語で掲載されている。またコーリ教授の研究を踏まえた研究成果としては、この他に、上田悠久「ホッブズ政体移行論—ローマの内乱から得た教訓」『政治思想研究』第19号、2019年5月がある。合わせて参照されたい。なお、本記録作成に当たっては桃山学院大学の梅田百合香教授から貴重なご指摘を頂いた。御礼申し上げます。諸般の事情から編集作業が遅延したことを関係各位に深くお詫び申し上げます（安武）。

安武（司会）：第50回関西大学法学研究所のシンポジウムを開始したいと思います。今回のシンポジウムでは「ホッブズのローマ：タキトゥスとマキアヴェッリの間で」というテーマで、フィレンツェ大学教授のダニエラ・コーリ先生をお招きし、「ホッブズ、ローマ、そしてマキアヴェッリ」というタイトルでお話しいたします。

すでにポスター、ちらし等々でもお知らせしていましたが、近年ホッブズ研究においては非常に興味深い進展が見られます。今、皆さんからご覧になって左手のところに私の研究室

にたまたまあった古いものから新しいものまで、日本語におけるホッブズ研究を適当に並べています。ホッブズは『リヴァイアサン』を書いた人物で、極めて理論的、演繹的、哲学的、あるいは自然科学や数学というものとリンクしたような議論を展開した人物として知られていると思います。ところが、20世紀末になり、ホッブズの初期の著作として *Three Discourses* 『三つの論考』 というものが、ホッブズの手によるものだということがほぼ確定して、これについての研究が近年進んでいます。これらを巡っては、ほぼ同時期にホッブズが書いたトゥキディデスの『ペロポネソス戦史』に関する翻訳とともに、古代世界をホッブズがどう眺めていたかということが問題になっています。つまり、通俗的に、極めて理論的、演繹的、哲学的、自然科学、あるいは数学というものとリンクしていると理解されてきたホッブズが、歴史ないしは歴史叙述、あるいはその歴史におけるある種の思慮の問題等々について思考を重ねていたということが分かってきたわけです。

今回お招きしたダニエラ・コーリ先生ですが、イタリア語で *Hobbes, Roma e Machiavelli* というタイトルの本を出されています。それ以外にも英語で *Politics and the Passions* という論文集の中でも「ホッブズの革命」というタイトルで論文を出されていますが、ダニエラ・コーリ先生の近年の関心というものは、まさにこういった初期の『三つの論考』をベースとしたホッブズの歴史、とりわけ古代ローマに関する歴史にあり、これらに対する関心を手掛かりとして、ホッブズの政治的な議論のあり方というものを解明しようとしているわけです。

その際に重要になってくるのが、古代ローマの共和政から帝政へと移行するその間において活躍した政治指導者のアウグストゥスです。それからリウイウス、彼はアウグストゥスが非常に重用し、ローマの歴史について、古代ローマの共和政期を非常に高く評価するような書物を書いた人物で、のちにマキアヴェッリがそれに依拠した本を書くわけです。さらにトゥキディデスあるいはタキトゥス、こういった古代ギリシアや古代ローマの歴史に関して書いた書物、あるいは古代ローマの歴史において重要な役割を果たした人物を、ホッブズがどう評価したのか。一面で非常に良く似たような議論を展開したマキアヴェッリと似ているところがありながら、同時に非常に対照的な古代ローマ史の展開をしている。そういうことについて今日はコーリ先生に詳しく、先生の最新の研究成果を踏まえながらご報告いただく予定です。

さらに今回は九州大学から木村俊道先生をお招きしました。討論者としてご登壇いただきます。木村先生は、イングランドのフランシス・ベーコンについて、君主に仕え君主に助言をする顧問官という立場から、どういう政治学を紡ぎだしてきたかということを研究のスタートラインに置いて、それ以降イングランドにおける宮廷の中におけるさまざまな政治的なあり方、そこでの政治学、いわゆる共和主義とは違う政治学について探求されてきた方です。テーマとしては、コーリ先生の報告の趣旨と非常に近いところで研究されていると私は認識してまいりまして、そういう意味で日本における研究成果とイタリア発のホッブズ研究、ホッブズないしはイングランドにおける政治思想史研究との間の、架橋ということで木村先生にご協力いただければと思っています。

金沢大学の石黒先生は、『マキアヴェッリとルネサンス国家』という本をお出しになっている

マキアヴェッリ研究者です。もともと石黒先生がダニエラ・コーリ先生と非常に親しくしておられて、石黒先生のおかげでダニエラ・コーリ先生を日本にお招きするということが可能になりました。今回は通訳という役割ですが、おそらく石黒先生もいろいろとお話したいことがあろうかと思しますので、そこは自由に、適宜入っていただきたいと思います。

皆さんにお配りしている資料、コーリ先生がもともとイタリア語で書かれたものを英語に直したものがお手元にあると思います。私の判断で、パラグラフごとに通し番号を打っておりまして、それに対応する形で日本語バージョンもお手元にあるかと思えます。コーリ先生は英語でお話しされますが、皆さんは英語ないしは日本語のバージョンに目を通しながら話を聞いていただければと思います。

ここから先は通訳の石黒先生にバトンタッチをして、さらに解説をいただきます。

石黒：本日は、今、安武先生からもご紹介がありました、こちらにいらっしゃるダニエラ・コーリさんに、彼女が書かれた『ステュアート朝イングランドとホップズ、ローマとマキアヴェッリ (*Hobbes, Roma e Machiavelli nell'Inghilterra degli Stuart*)』という本の、第9章の部分を中心にお話ししていただきます。

コーリさんと私は20年くらいのお付き合いになります。フィレンツェ大学で、もうとうにお亡くなりになりましたが、ルネサンスの思想史研究で非常に有名なエウジェニオ・ガレン先生のもとで学位を取られた後、フィレンツェ郊外のヨーロッパ大学院大学で博士号を取られ、現在は、これはちょっと学制が変わったので、学部ではなくて学類というふうには訳していますけれども、フィレンツェ大学の文哲学類の思想史の担当教授をしておられます。

ダニエラさんの関心は主にクローチェやジェンティーレといったような20世紀のファシズム期のイタリアの政治的な知識人の思想史的な評価と、それから今日のテーマですけれどもマキアヴェッリからホップズに至る近世初頭の政治思想の形成のフィールドにあります。イタリアの知識人向けの雑誌に、思想史のみならず現在のイタリアの政治外交に関する評論などを幅広く手掛けておられます。

主要な作品としては『クローチェ、ラテルツァ出版社、ヨーロッパ文化』、今日のテーマとも関連ありますけれども『トマス・ホップズの近代性』という、これが彼女のホップズ研究の第一歩だった本です。1995年です。それから『ジョバンニ・ジェンティーレ』、ジェンティーレはクローチェと並ぶファシズム期の重要なイタリアの哲学者で、その伝記などがあります。最近のこちらの英語の論文集など、また後ほどあちらにパンフレットがございますのでご覧下さい。『情熱と政治 1500年から1850年』、これはヴィクトリア・カーンなどアメリカの政治思想の学者たちとの共著の論文集ですが、プリンストン大学出版から刊行しておられて、英語圏やスペイン語圏などにも活躍の場を広げておられるようです。

今回は私がたまたま科研費の資金を得ましてダニエラさんを日本に招くことができました。皆さんに彼女の仕事を幅広く共有していただける機会はないかということで安武先生にご相談させていただいて、このような機会を設けていただきました。安武先生、どうもありがとうございます。

ございました。内容については、木村先生とのディスカッションの中で皆さんの認識も深めていただければと思います。では早速話していただくという形でよろしいでしょうか。

コーリ：では始めましょう。安武教授にはこの題目で話すよう関西大学にお招きいただき、日本におけるマキアヴェッリの専門家である石黒教授には私の原稿を日本語に翻訳くださり、感謝しております。本日の題目は「ホブズ、ローマ、そしてマキアヴェッリ」ですが、その理由は、両者が明確にローマと結びついていたことにあります。マキアヴェッリはローマについて多くを語りましたが、1995年に*Three Discourses*『三つの論考』が公刊されてから¹⁾、ホブズもまたローマについて語っていたことが分かり、ホブズとローマとの関係が重要かつ興味深いものとなりました。

確かに、トマス・ホブズとニコロ・マキアヴェッリは、二つの異なった国の二つの異なった時期に生きた、異なった思想家であります。ホブズがステュアート朝時代のイングランドで著作活動を行ったのに対して、マキアヴェッリはメディチ家のフィレンツェにおいて、とりわけ彼が仕えたピエロ・ソデーニの政権が崩壊した結果、全ての政治的な地位を失った後に、その著作活動を始めました。マキアヴェッリが執筆した『君主論』は、メディチ家に対する助言者として、フィレンツェの政治活動への復帰を求めてメディチ家に献呈されましたが、メディチから信頼されず、彼はカール・シュミットの言葉を使えば「挫折した政治家」であったのです。

このようにホブズが、[ステュアート家の17世紀の英国で、メディチ家が支配するフィレンツェのそれとは] 異なった問題や関心に基づいてものを書いていたのは確かであります。それにもかかわらずホブズとマキアヴェッリは、それぞれ近代政治思想の始祖と目されております。レオ・シュトラウスは1936年にその著作である『ホブズの政治哲学』において、ホブズを、近代の政治学と近代国家の定礎者として紹介しております。しかし彼はその後同じ書物の1952年のアメリカ版において、この点につき1936年段階の自分が間違っていたと告白をしています。なぜならば初版の刊行の時点において彼は、未だマキアヴェッリをしっかりと読み込んではいなかったからだといいます。そしてシュトラウスは、改めてマキアヴェッリを近代政治学の始祖に指名し、それに対してホブズを近代国家の定礎者[理論家]として位置づけました。

よく知られておりますように、レオ・シュトラウスにとりマキアヴェッリは、悪の教師でありました(*Thoughts on Machiavelli*, 1958)。それというのもマキアヴェッリが、古代ローマに回帰するために、宗教を解体して革命を成し遂げようと試みたからです。シュトラウスによればマキアヴェッリこそは、ナショナリズムとファシズムの原型でした。一方ハンナ・アーレントはその著『過去と未来の間で』において、マキアヴェッリの政治モデルは古代ローマであ

1) Arlene Saxonhouse and N. B. Reynolds, *Three Discourses: A Critical Modern Edition of Newly Identified Work of the Young Hobbes*, University of Chicago Press, 1995. なお注9も参照。

り、国民国家が勃興する初期近代ヨーロッパに生きた彼は、カトリック教会をイタリア統一の障害物と判断し、まさにその故に反教皇主義の立場に立ったとしました。アーレントによれば、カトリック教会に対する論争を通じてマキアヴェッリは近代国民国家の定礎者と、近代的革命の父祖となったのであります。しかしアーレントは、マキアヴェッリが「革命」という言葉を一度も使わず、また彼がフィレンツェにおいて革命を目の前にしなかったことを、考慮に入れていませんでした。実際フィレンツェにおいて革命が生じることはありませんでしたし、アレサンドロ・カンピ（Alessandro Campi）によれば、マキアヴェッリ自身は革命ではなくて陰謀というものの熱中者でした。『フィレンツェ史』においてマキアヴェッリが言及しているように、フィレンツェでは、1378年に毛織物労働者たちの反乱、チオンピの乱が起きただけでした [が、その首謀者たちの無知により途中で挫折して終わってしまいました]。

シュトラウスと同様アーレントにとって、マキアヴェッリは彼の時代のイタリアに、古代ローマの再生を追い求めた人物とされました。しかしシュトラウスとは異なり、アーレントによれば、マキアヴェッリは、ローマの成功が、ローマ人の宗教、伝統や権威への崇拜によることを理解できなかったが故に失敗しました。アーレントにとって、過去と現在と未来はローマにおいて結びついており、ローマ人は新しい世代に過去の世代の価値を教えていたのです。近代に批判的な哲学者であるアーレントにとり、20世紀におけるヨーロッパの危機と全体主義は、16世紀から17世紀における政治と宗教の一体性の終焉が生み出したものでした。その著『全体主義の起源』においてアーレントはホッブズのことを、勃興しつつある革命的ブルジョワジーの政治的言語の創始者、アメリカに最初の植民地を建設途上のリヴァイアサンの構築者と紹介しております。アーレントにとりホッブズは、大英帝国の父であり、セシル・ローズやエドワード・キップリングの先駆者であったという意味で、否定されるべき思想家でした。彼らこそは19世紀において、続く20世紀の反ユダヤ主義や全体主義へと連なる、人種的な帝国主義の支持者だったのです。

よく知られておりますように、アウグスティヌスをテーマにその博士論文を執筆したアーレントにとって、アウグスティヌスは、ローマの哲学者で偉大な西洋の哲学者の一人でした。彼女はユダヤ思想とキリスト教思想を西洋文明の基盤ととらえ、ヨーロッパの宗教的一体性の終焉こそが、ヨーロッパの災厄の一切の始まりとなったと考えたからです。『過去と未来の間に』でアーレントは、古代ローマとカトリック教会との結びつきに、マキアヴェッリが鈍感であったとしております。他方ホッブズはといえば、彼が『リヴァイアサン』において記した通り、ローマ・カトリック教会をローマ帝国の亡霊と見なし、ローマ皇帝の墓の上に教皇の座が立てられたとしました。ホッブズにとって、司教の指名は、歴代のローマ皇帝の権限であり、ローマの司教たちは西洋の王たちを任免する権限を持っていませんでした。ホッブズによれば、教皇はコンスタンティヌスを裏切ったのです。つまりホッブズはコンスタンティヌス寄進状についてのヴァッラの主張に従い、ヴァッラによれば、コンスタンティヌスは教皇にローマと西ローマ帝国の支配権を与える勅令を出さなかったとされます。いずれにせよ、イングランド人で国教会主導のブリテンに忠誠を誓う臣民であったホッブズにとって、教皇は司教を任命する権

限を持たないし、ましてや国王や皇帝を廃位にする権限など持っていないのです。教皇には国王や皇帝を破門したり廃位したりする権限はないのです。こうした理由から、宗教が国家に奉仕すべきであり、国家が宗教に奉仕すべきでないとするマキアヴェッリにホップズは同意しました。またマキアヴェッリとホップズの宗教モデルは、宗教が国家に奉仕する古代ローマにあるのです。マキアヴェッリはチューダー期のイングランドにおいて、ヘンリー8世の支持者たちに大いに愛されました。他方、レジナルド・ポール枢機卿をはじめとする、国王が宗教的権力も持てば、絶対君主になってしまうとして〔君主の宗教権力への授与に〕反対した者たちの全てによって、マキアヴェッリは呪詛排斥されたのでした。そして1533年のローマ教会との断交と1534年の首長令の発布以降、ヘンリー8世はイングランド国教会の長となり、その結果、絶対君主の座に登ろうとしました。マキアヴェッリは、当時のローマ・カトリック教会を攻撃したが故に、時にブリテンのプロテスタント改革の始祖とされることがあります。とはいえ、マキアヴェッリ自身にとっての英雄は、ロドリゴ・ボルジア枢機卿の息子にして、アレクサンデル6世の子、チェザレ・ボルジアであり、彼こそはマキアヴェッリによればイタリア統一を企画した人物であったことは考慮に入れられるべきでしょう。

マキアヴェッリは20世紀において、1975年のポーコックの『マキアヴェリアン・モーメント』²⁾の刊行以来、大きな復活を遂げることになり、変化が訪れました。この書を通じてマキアヴェッリは、『オセアナ共和国』の著者、ハリントンからアメリカ合衆国の建設者たちに至る人々に影響を与えた政治思想家にして、共和主義の定礎者として提示されました。その上で共和主義は、社会契約的伝統（と自然法論）というパラダイムに対抗する、歴史学的なそしてまた政治学的な新しいパラダイムとなります。ポーコックの共和主義は、古典的共和主義とも異なるものでありました。ポーコックはマキアヴェッリの人間観を、アリストテレスの社会的で政治的動物としました。他方、クエンティン・スキナーにとって、マキアヴェッリにとっての人間は「悲惨」なもので、ホップズが想定する人間と近似しています。1997年公刊の『自由主義以前の自由』³⁾を執筆した近年のスキナーにとって、マキアヴェッリはネオ・ローマ人であり、その共和主義的な伝統はその哲学的・歴史的根源を、まさにこのローマに有しています。ローマの共和主義に連なる歴史家としては、サルスティウス、タキトゥス、リウィウスそしてセネカが挙げられます。ホップズと複雑な関係を有する作家スキナーによれば、マキアヴェッリにとっての人間は、ホップズに類似しており、〔悲観的なもので、アリストテレス的意味での政治的な動物ではないのです。マキアヴェッリとホップズが古代ローマの神話を共有していることについては、疑う余地がありません。〕

ローマに関して言えば、『ティトゥス・リウィウスの最初の10巻についての論考』（『ディスコ

2) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton University Press, 1975 [『マキアヴェリアン・モーメント——フィレンツェの政治思想と大西洋圏の共和主義の伝統——』田中秀夫他訳、名古屋大学出版会、2008年]。

3) Quentin Skinner, *Liberty before Liberalism*, Cambridge University Press, 1998 [梅津順一訳『自由主義に先立つ自由』聖学院大学出版会、2001年]。

ルシ)の著者であるマキアヴェッリが、古代ローマを愛好し、ローマ共和国を自身の政治モデルとしていたことを我々はよく知っています。またホッブズにとっても古代ローマは政治モデルでしたが、ホッブズが着目するローマはマキアヴェッリのそれとは異なって、元首政のローマであり、そこでの英雄はアウグストゥスであり、この皇帝の著作家こそがタキトゥスでありました。『リヴァイアサン』においてホッブズは、ステュアート朝のジェームズ1世を、最も聡明なるブリテン王と評しましたが、それは彼がイングランド人、スコットランド人、ウェールズ人といった、それぞれ相異なる民族を一つの王国に統合したからに他なりません。この点においてホッブズは、ジェームズ1世を古代ローマ人と比肩させています。他方『ピヒモス』にあって彼は、主権者(支配者)というものは、コンスタンティヌス帝以前の古代ローマの皇帝がそうであったように、教会の長たるべきであるという点に着目をしています。『リヴァイアサン』の法的モデルはホッブズにとり、ローマ法体系に他なりませんでした。そして法律の終わるところから自由がはじまるとするホッブズの自由の教説もまた、ローマ法の基礎をなすものでありました。

ホッブズの古代ローマとの関係[そしてまた『リヴァイアサン』という著作]を理解する上で極めて重要であるのが、1620年にロンドンにおいて匿名で刊行された作品、『三つの論考』に他なりません。それは1936年に、レオ・シュトラウスにより、それらがホッブズの直筆になるが故に、また『リヴァイアサン』において彼が展開した多くの概念がそこで示されているが故に、若きホッブズの作とされた作品であります。それは1995年になって、ホッブズの真作としてようやく公に認知されるに至りました。『三つの論考』の中には「ローマについての論考(A Discourse of Rome)」、「タキトゥスの冒頭部分についての論考(A Discourse of beginning of Tacitus)」、そして「法についての論考(A Discourses of Lawes)」が収められています。このうち最後の論考は、『リヴァイアサン』の市民法についての章とほとんど同一です。

これらの論考[私は、自著『ステュアート朝英国におけるホッブズ、ローマ、マキアヴェッリ』において分析を行いました]の著者認定にかかわり、大きな問題は、ホッブズのイタリア旅行の時期を確定することでした。[この点につき決着が付けられたのは、歴史家たちと哲学者たちの間で、度重なる議論が行われた果てでした。]それというのもホッブズ自身は自身の前半生の往復書簡の大半を、放棄してしまっていたからです。彼はヴァージニア・カンパニーの株主であり、このヴァージニア・カンパニーのメンバーの幾人かは、チャールズ1世の処刑に賛成したのみならず、議会軍の一員として戦っていました。もちろんホッブズは王党派の一員でしたし、イングランド内戦の期間中はロンドンを離れパリで亡命生活を送っており、パリにおいて彼はチャールズ2世の家庭教師すら務めていました。とはいえステュアート家のチャールズ2世により王政復古が成し遂げられてしまっただけから、彼自身の往復書簡を隠滅してしまうことが適当であると、彼には判断されたのです。ともあれ多くの研究と資料調査の後、ブリテンの歴史家たちは、ホッブズがデヴォンシャー伯ウィリアム・キャベンディッシュとともに、1614年の6月から1615年の10月にかけて、イタリアに滞在していたことを明らかにしました。ホッブズはこの伯爵と同年齢で、ともにオックスフォードで学んでおり、そのゴーストライタ

ーであり、秘書であり、身辺の世話係だったのです。1608年ウィリアム・キャベンディッシュは18才でクリスティアン・ブルースと結婚しています。彼女は〔スコットランドの司法官〕エドワード・ブルースの娘でした。このエドワード・ブルースは〔1600年以降ロンドンにあって、〕スコットランド王ジェームズ6世（後のイングランド王ジェームズ1世）の盟友であり、大使を務めた人物です。彼はメアリ・スチュアートの息子であるジェームズが、エリザベス1世の崩御の後イングランド王位を継承するための秘密交渉のためにロンドンに派遣されました。メアリ・スチュアートは、エリザベス1世によって処刑されたカトリック殉教者でありましたが、その息子、スコットランド王ジェームズ6世は、ジェームズ1世の名で、イングランドとウェールズの王となったので、ロンドンへ到着した際には意気揚々としていました。つまりキャベンディッシュはジェームズ1世の昵懇の人物だったわけです。彼はすでに議会に議員として選出されており、また今回のイタリア旅行は、決して物見遊山を目的とするものでも、文芸修行を目的とするものでもありませんでした。キャベンディッシュは、ジェームズ1世とイタリアにおける（特にイングランド宮廷にとって非常に重要な都市、ヴェネツィアにおける）イングランド大使との仲介役を果たしました。また、キャベンディッシュは、イングランド宗教改革に好意を示し、かつまたローマ教会の状況に批判的であった二人の聖職者、パオロ・サルピヤフルジェンツィオ・ミカンツィオと接触する任務を負っていました。よく知られる通りヴェネツィア人は一度、カトリック同盟により1509年にアニャデッロで敗北させられています。また〔パウロ5世からの破門措置も受けていました。〕ヴェネツィア人たちは、カトリック教会の同盟者であるスペイン人たちが、教皇とヴェネツィアとの関係悪化に付込み、ヴェネツィアのバルカン半島における支配地を奪い取るのではと、絶えず疑念を抱いていました。スペインを脅威と見たジェームズ1世は即位すると即座に和平を結んでいましたが、スペインがブリテンにとって最悪の敵であることは変わりませんでした。ホップズとキャベンディッシュは、パオロ・サルピヤフルジェンツィオ・ミカンツィオと親交を結び、サルピが執筆した『トリエント公会議史』は秘密裏にロンドンに送られ、1619年にロンドンで公刊されました。この著書はローマ・カトリック教会に対して非常に論争的でした。ミカンツィオは1615年から1620年にわたって、時折、イングランドのスパイ（情報提供者）となり、イタリア語でキャベンディッシュ宛に手紙を書き送っています。この手紙を英語に翻訳することが、ホップズの役目でした。これら一連の手紙を通じてミカンツィオは、イタリアの政治・宗教的情勢や、中欧からオスマン帝国領にかけての地域における地政学的地域に生じた出来事を報告しています。ミカンツィオからのこれらの手紙は、ロンドン駐在のヴェネツィア大使館に潜入していた教皇の逆スパイにより遮断され（「取上げられ」）、それらはウィーンの教皇特使へと送り届けられた後、さらにローマに回されました。これらの手紙は今日、ローマのバチカン図書館に収められ、公刊されています。

ジェームズ1世は、ローマ・カトリック教会と良好な関係を持ちたいと望んでいました。〔彼はイタリアにおいて、とりわけローマ教皇庁において、プロテスタントでありながら同時に、カトリックの女殉教者（メアリ・ステュアート）の息子として高く評価を受けていました。〕事実、1603年に彼がイングランドの玉座に登った時、彼は直ちにスペインとの講和条約を結んで

います。そしてしばしば教皇庁に対して、キリスト教世界の再合同と、イエズス会士、ピューリタン、長老派といった過激派の放逐のための、相互の宥和を提案しています。ジェームズ1世は、プロテスタントの原理派も、カトリックの原理派も警戒していました。イエズス会士は1588年に無敵艦隊とともにイングランドへの侵入を試み、何人かのカトリック教徒が1604年にジェームズ1世とその家族の殺害を試み(火薬陰謀事件)、1610年にはカトリックの原理主義者たちがフランスのアンリ4世を殺害しました。長老派やピューリタンは、ホッブズによれば、イングランド内戦の張本人でした。

リンダ・レヴィ・ピックが強調するように、ジェームズ1世はローマ帝国に魅了され、ブリテン島の皇帝を名乗り、1603年のイングランド王への即位の際に作成されたメダルや貨幣にローマ皇帝のように刻印されることを望みました。ヘンリー8世以降、愛憎半ばするイタリアは、イングランドのジェントルマンの教育に必須の旅行先を考えられていました。ローマ・カトリック教会とイングランドとの関係が苛烈であったヘンリー8世の治世期だけは、ブリテン人にとってローマに赴くことは危険でしたが、大抵の時期において、イングランド人はイタリアを訪れました。彼らはかの地の芸術、建築、絵画、文化を愛好したのです。[また1688年に至るまでイングランドの医者パドゥアの大学で学びました。]ジェームズ1世期のロンドンでは、支配階級は帝国の樹立を考えていましたし、ローマは彼らを知る限り最も偉大で最も長続きた帝国のモデルだったのであり、ローマ史はブリテンの図書館の中で特別な地位を占めました。王室付の建築家イニゴー・ジョーンズの手を介して、ジェームズ1世が建設させた新しいロンドンは、ウィトルウィウスとパツラディーオに触発されており、ジョーンズはブリテンにローマのウィトルウィウスを知らしめた人物となりました。同様にワシントンのホワイト・ハウスはパツラディーオ様式であります。「ローマについての論考」においてホッブズは、ローマを絶賛しており、その主権の持続性故に神聖なる力を持つ都市と評しています。統治形態のあらゆる変遷にもかかわらず(国王、執政官、護民官、独裁官、皇帝)ローマは偉大な帝国となり、帝国の終焉後は、西洋における最も重要な宗教をもつ都市となったのです。

「タキトゥス冒頭部分についての論考」におけるホッブズの関心の焦点は、ローマ共和国の危機に宛てられており、彼にとっての英雄はアウグストゥスです。このアウグストゥスがローマの内戦に終止符を打ち、共和政を帝政へと改変した人物だったからです。共和国の末期、ローマは未曾有の危機に直面していました。ローマは僅か20年の間に5回もの内戦を経験し、帝国はしばしば崩壊の危機に瀕しています。ローマ共和政はその国際的支配をギリシアの都市国家と同じように運営していました。後にカエサルやアウグストゥスが行ったように、ローマ以外のイタリア人に市民権を与えることも、帝国のエリートを統合することも、問題とはなり得なかったのです。

ホッブズはマキアヴェッリとマキアヴェッリの共和政ローマに対する崇拝をよく心得ていました。そしてマキアヴェッリが『君主論』で示した、女神としての運命についての名高いメタファーを彼自身も取り上げつつ、共和国のことを皮肉の対象としたのです。『君主論』において運命の女神はもて囃されるのではなく、むしろ力づくで征服されています。ホッブズによれば、

共和国が女であることを良く知っていたので、ユリウス・カエサルは共和国を君主国へと作りかえるにあたって、ポンペイウスのように共和国に媚びへつらうようなことはしませんでした。むしろそれを全力を挙げて攻撃し、クラッススやポンペイウスを除去した〔あげく、その死に至るまで第一人者の地位に留まり続けた〕のです。「タキトゥスに関する論考」においてホップズは、太古のローマの7人の王の時代から共和政、さらにはアウグストゥスの元首政に及ぶローマの歴史を要約しています。

最後の王であるタルクィニウス傲慢王の失脚と共和政体の樹立の後のローマをホップズは、「熱を出し寝床の上で七転八倒するも安息を得られない病人」として描き出しました。ホップズはマキアヴェッリの『ディスコルシ』をよく熟知していました。そして彼がタキトゥスの注解を書くことを選択したことは、両者の違いを示しています〔論評の媒介として共和主義者ティトゥス・リウィウスを選択したマキアヴェッリに対する、暗黙の批判となります〕。実際には共和主義者リウィウスは、『ローマ革命』（1939年）の著者ロナルド・サイム⁴⁾によれば、アウグストゥスお気に入りの歴史家でした。彼は実にかエサルの存在をローマ史から消し去るべく、アウグストゥスに重用されたのです。その狡猾さの故にホップズに愛されたアウグストゥスは、カエサルがクラッスス及びポンペイウスとともに実施した第一回三頭政治、そしてアウグストゥス自身がレピドゥス及びアントニウスとともに参与した第二回三頭政治をローマ人から忘却せしめるために、人々の記憶からカエサルのことを取り除こうとしました。〔さらに言えばカエサルの存在は、内戦と共和国の終焉自体を人心から忘れ去らせるためにも、ローマ史から抹消させられるべき事柄だったのです。〕こうした理由からアウグストゥスは、共和国を賛美するティトゥス・リウィウスを偏愛したのです。共和国を君主政へと改変したアウグストゥスは、ローマ人に自分のなしたことを理解させたくなかったのです〔彼は自分自身を共和政の継承者として押し出そうとしたのです〕。イタリアにはトマージ・ディ・ランペドゥーサの著名な小説、『山猫』があり、この山猫の論理とは、「何も変えないために全てを変える」でした。アウグストゥスは山猫とは対照的で、何も変えずに全てを変えたのです。アウグストゥスはローマの共和政の制度を何も変更しませんでした。彼は自分自身をローマ共和政のあらゆる制度に基礎づけるか、あるいは、彼に忠誠を誓う人物にこれらの制度を委ねたのです。最終的に、彼はこの帝国の全軍の長となったのです。

タルクィニウス傲慢王の治世における古代ローマ王政の終焉についてホップズは、マキアヴェッリとは違う解釈を示そうとしました。マキアヴェッリによればタルクィニウスが追放されたのは、彼の息子がルクレツィアを陵辱したからではなく、王国の法を毀損し、暴君として統治し、元老院からその権威の一切を剥奪した〔ローマから自由を剥奪した〕ためでした。一方、ホップズによればタルクィニウス傲慢王の王権の喪失の原因は、単に息子がルクレツィアを陵

4) Ronald Syme, *The Roman Revolution*, Oxford University Press, 1939. [逸身喜一郎・小池和子・上野愼也・小林薫・兼利琢也・小池登訳『ローマ革命——共和政の崩壊とアウグストゥスの新体制』（上・下）岩波書店、2013年]

辱したからに過ぎません。そしてホッブズの強調するところによれば、ルクレティアに対する暴行は、王自身の所業ではなく「一私人である」王の息子によるものでした。またよく知られているように、マキアヴェッリはローマを、平民と貴族の間で分裂したものとして描写し、この両者の葛藤を通じてローマの実力というものが涵養された（確立した）と論じています。しかし、マキアヴェッリのことを原初的マルクスと考える研究者もいるにせよ〔クローチェはマルクスのことをプロレタリアートのマキアヴェッリと称しています〕、マキアヴェッリにとってこの葛藤は、マルクス流の階級闘争ではありませんでした。エマニュエル・クティネリ・レンディーナが指摘するように、このローマ国内の葛藤は、マキアヴェッリにとり、人民に武器を手を取らせ、ローマの支配権の防衛と拡大を目的として、彼らを鍛錬するために必要とされました。またロナルド・サイムが『ローマ革命』において示したところによれば、ローマ共和国は階級闘争の上には全くもって基礎づけられてはいません。なぜならローマの共和政は寡頭政であって、指導者層は、全て（古い家系を持ち富裕な）貴族層によって構成されていたからです。サイムの『ローマ革命』は、貴族と平民との間の階級闘争に共和国が基礎付けられていたとするマルクス主義的パラダイムを打倒したが故に、古典となりました。ローマは寡頭政であり、最も富裕で古い家系の者が、あらゆる政治生活やすべての政治制度を、護民官も含め、統制していました。いわゆる「新入り（*homines noves*）」が業務を認められるのは、彼を登用し擁護しようとする貴族の家系の支援を得ている場合に限られました。同様に著名な護民官であったグラックス兄弟も貧しい貴族の家系出身でした〔カエサル自身、ローマの貴族家系にその出自を有しています〕。主権者といえども法に服従しなければならないとするマキアヴェッリとは違って、ホッブズにとり主権者は「法から超越した君主（*princeps legibus solutes*）」でした。彼は「タキトゥスに関する論考」におけるこのような判断を『リヴァイアサン』の26章においても繰り返しています。そこでは、君主国において王は、立法し法を廃止する、まさにそれ故にこそ主権者は、自分自身の上に法を作ることはできないとされます。王と議会の対立がしばしば内戦を懸念させたジェームズ1世の治世下に執筆された「タキトゥスに関する論考」において、ホッブズは、内戦のまっただ中、パリにおいて執筆された『リヴァイアサン』において提示されたものと、類似の判断を示しています。「法に関する論考」においてホッブズは、アウグストゥスとともにローマ人は自由を失ったが、その代わり、20年にわたる内戦の後、アウグストゥスは平和を授けたのだと言っています。クエンティン・スキナーによれば、ホッブズは、恐怖の自由主義として知られる、戦争と内戦の間に生きたのでした。

マキアヴェッリとは異なり、ホッブズにとりタルクイニウス傲慢王の治世の終わりは、必然的に自由を産み出す変化とはなり得ませんでした。なぜなら君主政が必然的に暴政に転じるとは、たとえそのようになる可能性があるにしても、必ずしも言えないからです。いずれにせよ〔「タキトゥスに関する論考」における〕ホッブズにとっては内戦よりも暴政のほうがましであり、その点で、『リヴァイアサン』18章で提示する議論を先取りしています。彼にとって、最悪の事態は自然状態への回帰であり、そこで各人は自由で、あらゆる権利、他者の身体に対する権利すらも持ちます。しかし、誰もが誰かに殺害されてしまう危険性があるために、誰一人に

とつても、いささかの安全すら存在し得ない状態です。同様にホッブズにとっては、敗戦による国家の終わりよりも暴政の方がまだましでした。というのもいったん敗戦ともなれば、各個人は外国の主権者に従属することになり、暴政下におけるよりも少ない自由しか享受できないからです。またホッブズにとり重要なのは個人の自由であり、彼は自由が力と結合していると信じていました。しかし、19世紀や20世紀の自由主義とは異なり、『自由主義以前の自由』においてスキナーが強調するように、ホッブズにとっての自由とは国家の自由であり、個々人の自由ではありませんでした。国家が独立していなければ、その中に住む各個人もまた自由ではあり得ません。同様に、マキアヴェッリにとつてもまた自由は個人の自由ではなく、常に国家の自由でした。スキナーも語るように、各個人に関して言えば、主権者の性格の相違に応じて、国家が提供する自由の度合いには増減が生じます。そしてここが大事なことなのですが、政治生活が展開できるよう、国家は常に自由で独立した存在でなければなりません。加えてホッブズによれば、暴君がいても、より自由を重んじる人物が君主ないし支配者になることで、変更可能なのです。

「タキトゥスに関する論考」におけるホッブズによれば、どんな国家もその始原の様態は偶然に左右されます。もし都市の創設者が万人に対する絶対権力を有しているなら、彼はまた絶対的な支配者ともなるでしょう。もし創建者たちが一つの小集団をなしているのであれば、この小集団が都市の統治の任にあたることとなります。第一の事例として、ロムルスは都市ローマの創建者にして王となりました。『ディスコルシ』においてマキアヴェッリはローマ共和国の終焉を嘆いておりますが、他方ホッブズは、共和国の滅亡によりローマ人がその自由を喪失したことを認めつつ、アウグストゥスの即位を積極的に評価しています。なぜならこの出来事こそがローマの20年にわたる内戦を終結させ、平和をもたらしたからです。ここでアウグストゥスはホッブズにとり、マキアヴェッリ的な人物として描き出されています。彼は、共和政を君主政に転じるために、注意深く偽装を用い、嘘をつくことができました。なぜなら共和国の自由に馴染んだ人民に君主政を受け入れさせることが、いかに困難なことを彼はよく心得ていたからです。政治家が嘘を上手につくことを心得ねばならないということについて、マキアヴェッリとホッブズは同意していました。ホッブズはまさにアウグストゥスを、偽装と虚言の大家であったが故に礼賛するのです。

2011年、シカゴ大学の政治学教授であるジョン・ミアシャイマーは、その著『リーダーはなぜ嘘をつくのか』⁵⁾において、政治的なリーダーが、対外政策において国民に嘘をつかねばならないことを示しています。そこでミアシャイマーはイラク戦争に関わる、名高い大量破壊兵器の一件におけるブッシュJr大統領の事例に言及をしています。そればかりではありません。彼は1941年の「グリア事件」にも言及しています。この件につきルーズベルトは、対ドイツ戦に

5) John J. Mearsheimer, *Why Leaders Lie: The Truth about Lying in International Politics*, Oxford University Press, 2011. [奥山真司訳『なぜリーダーはウソをつくのか——国際政治で使われる5つの「戦略的なウソ」』(五月書房、2012年)]

介入したい一心から、嘘をつき通したのです。またダラス・G・デネリーもその著『悪魔の勝利』⁶⁾において、西洋の政治において嘘がどれほど当たり前のものであったかについて書き記しています。

ホップズによれば、カエサルは共和国を打倒しました。そして権力がアウグストゥスの手中に帰した時、彼は、共和政を君主政に変更することを決断しました。ホップズはブリテンの読者に向けて、アウグストゥスを、ローマの内戦に終止符を打ち、ローマとローマ帝国にとって平和の時代へと道を開く、唯一の機会として描きました。またローマ帝国の植民地も平和を待っていました。というのは、植民地はローマの内戦において最初に犠牲となったからであります。植民地は贈賄と墮落とともに支配されていました[植民地は、ローマの諸党派間の争いによりずたずたに引き裂かれ、腐敗墮落した司政官たちの餌食にされていました。こうした腐敗が司政官にとり気がかりだったのは、植民地から彼らが入手するはずの賄賂でしかなかったのです]。ホップズによれば、一つの国家が党派によって分裂していると、腐敗は一層深刻なものとなるのです。ローマの腐敗を語りつつホップズは、当時のイングランド人にも極めて親しい状況を描き出していたのです。

「タキトゥスに関する論考」においてホップズは、後の『リヴァイアサン』に彼が取り上げることになる、いくつかの基本的概念に言及しています。彼は、君主政を民主政や貴族政[ないしは寡頭政]と比べ、より好ましい政体であると宣言しました。『リヴァイアサン』の第19章でホップズは、その権力概念において君主政、民主政そして貴族政は全く異なるところがなく、それらの間に差異が生まれるのは、人民の平和と安寧を保証する能力という点においてのみである、と主張します。17章でホップズは、君主政こそ一国の平和維持のためには最善の政治システムであると主張しています。というのもアリストテレスとは対照的に、人間は蜂や蟻とは異なるからです。蜂には情念も言葉もなく、その利益・関心は共通の善にあります。これに対して人間は、私的利益と公的利益は同一ではありません。人間の間同意は、自然的なものではなく、契約を通じてのみ見出すことができ、かかる契約は自然的なものではなく人為的なものなのです。

[1615年から1620年の間に]「タキトゥスに関する論考」を執筆した時、ホップズはヴァージニア・カンパニーの小株主であり、自分の主人であり友人でもあったウィリアム・キャベンディッシュのためにのみ投票を行っていましたが、この業務の世界にとどまるに際して、この業務と政治との関係や、ステュアート王朝期の諸議会における、政治的闘争における利益をめぐる葛藤を、よく理解していました。[そして彼は正に私的利益が公的利益に優越するということを示しつつ、君主政として表わされる、より小さな害を選択したのでした。]シュンペーターにとってそうであったように、ホップズにとっても、君主政と共和政との相違は手続きの上の相違に帰着します。この手続きの上の相違とはすなわち、支配者が権力に到達する手法の違いに

6) Dallas G Denery II, *The Devil Wins: A History of Lying from the Garden of Eden to the Enlightenment* Princeton University Press, 2015.

過ぎず、権力を掌握した者が権力を行使する手法の違いではありませんでした。[そして民主政における権力獲得競争は、権力の所有の正統性を獲得するための人民投票に基礎づけられていました。]

よく知られているように、ホップズは民主政も非難していました。彼は、『三つの論考』を刊行した1620年に、トゥキディデスの『ペロポネソス戦争史』の英訳に着手し、以後10年にわたって翻訳作業に従事しました。トゥキディデスを英訳するのは、国家にとって民主政の弊害をイングランド人に理解させるためである、と彼は絶えず言明していました。ホップズの『ペロポネソス戦争史』の英訳は、英語圏で大変な名声を博し、「民主政」という用語はアメリカ合衆国の共和国憲法において言及されませんでした。ペロポネソス戦争は、自然状態や万人の万人に対する闘争といった概念の形成に際して、ホップズに多大な影響を与えています。トゥキディデスは万人の万人に対する闘争を、「停滞（stasis）」と呼びました。トゥキディデスにとって「停滞」とは内紛のことで、人間本性にとって自然な状態であり、ありとあらゆる国家や社会に出現するものであります。トゥキディデスにとって、停滞の典型は、コリントスの植民地、コルキアの事例でした。民主派の者たちが貴族たちをそのエピダモスの植民地から駆逐した後、コルキラはアテナイに介入を要請します。この出来事こそがペロポネソス戦争の発端となりました。ギリシアの都市とその植民地の党派の首領たちは、国内の自派の敵対者たちを追い出し権力を己がものとすべく、アテナイかスパルタのいずれかに助力を乞いました。その結果、彼らはアテナイ派とスパルタ派に分かれて対立しあつたのです。トゥキディデスにとり対外戦争というものは常に、人間心理の自然的条件に他ならない停滞と結びついています。トゥキディデスはギリシア文明の解体、実体としてのアテナイの解体を描写しています。アテナイは、紀元前430年から429年のペストにより、そして都市の物理的実体を破壊した内戦によって、打撃をこうむりました。トゥキディデスによるこうした叙述からホップズは、『リヴァイアサン』29章において、国家というものは物理的な身体と同様、内的な病弊により死亡するものだと主張します。国家が戦争により破壊されなくても、内的な無秩序により死滅するということもあり得るのです。ホップズに言わせればこのような場合、国家の死の責任は、市民ではなく、国家をこのような脆弱なものとして設立してしまった建国者たちに帰されます。国家の創設者が、後により多くの権力を得ることができると考えて、統治に必要な権力の保持を断念する時、こうした人物は国家の平和と安全を脅かすことになるのです。しかしこれこそ、ホップズによれば、国家の安泰にとって否定的な論理に他なりません。というのも市民が権威のこのような欠乏に慣れ親しんでしまうと、その状態を変えようとせず、隣国の支援を当てにして自分たちの権力を維持しようとし、国家が統合されないままになってしまうからです。こうしたことを書いた時ホップズは、王たちと諸侯たちとの紛争に彩られた中世のイングランド史に思いを馳せています。すなわち諸侯たちは、フランス王または教皇たちに支援を乞いつつ、イングランド王に反抗したのです。そしてこのようなイングランド中世史とその諸々の紛争がホップズに、共和政ローマの歴史を想起させたのです。ローマ共和国においては、権力の分割があり、元老院や執政官、司法官に、権力が分割されていました。この分割がホップズに

よれば、[グラックス兄弟の]反抗、そして続いては内戦をもたらし、遂にはローマ共和国の滅亡の至ったのです。ホッブズが生きだしたジェームズ1世のステュアート期のイングランドにおいても、議会と主権者の間の激しい葛藤が絶えませんでした。なぜなら議会はオランダと気脈を通じ、アメリカ植民地をめぐる航海・商業上の敵対者であったスペインと一戦交えようとしたのに対して、スペインの海軍力に恐れをなしたジェームズ1世は事を起こすのに慎重だったからです。ジェームズ1世がスペインの勢力を如何に恐れたかは、その息子をカトリック系の王女たち（スペインやフランス）と、そしてその王女をプロテスタント系の王子たち（ドイツやオランダ）と結婚せしめた点からも窺われます。とりわけ議会とジェームズ1世の長きにわたる紛争の大半は、王が皇太子チャールズのために推進したスペイン王女との結婚の計画に集約されました。当時のヨーロッパの情勢は極めて不透明でした。1618年に勃発し1648年に終結することになる30年戦争は、第二次世界大戦を上回る災厄を、ヨーロッパにもたらした戦争でした。

既に見てきたように、ホッブズとマキアヴェッリの違いは、両者がヨーロッパ史において異なる時期に生きだしたということにも由来しています。マキアヴェッリは都市フィレンツェを古代ローマのそれのような強固でかつ拡大しうる共和国とし、フィレンツェ軍をローマ軍のようにすることを望みました。しかしフィレンツェ人は、農民、職人、商人、銀行家から構成されており、彼らを戦士へ仕立てることはできませんでした。対してホッブズは、一国の中に生き、彼にとっての問題は内戦と市民の武装の放棄にありました。マキアヴェッリにとってフィレンツェ人、さらに言えばイタリア人は余りに静穏〔平和愛好的〕であり、ホッブズにとってブリテンは余りに興奮していたのです。とはいえホッブズはマキアヴェッリ以上にマキアヴェッリ的であったと言えます。というのも『リヴァイアサン』において、君主が、獅子と狐、強力で狡猾であるとするマキアヴェッリの理論を彼は批判したからです。ホッブズによれば、最も強く最も狡猾な者ですら、その眠りに乗じてあるいは弱者の連合により、打ち殺されてしまうということがあり得るのです。ホッブズのこうした理論は、2013年『リヴァイアサンを制限すること—ホッブズと国際関係』⁷⁾においてラリー・メイにより展開され、国際関係論の分野においてホッブズから学ぶことが、未だなお数多く残っていることを示唆しています。2001年9月11日の攻撃は、国際共同体の最強のメンバーたる合衆国すら最弱のメンバーの一つによって、すなわちイスラム・テロリストによって攻撃されるのだということを白日の下に晒しました。ラリー・メイが結論づけたように、9.11に合衆国は眠っていたのであり、その眠りの最中に、とるに足りない武器により襲撃されたのです。

マキアヴェッリはホッブズと同一の経験を生きだした訳ではないということが、配慮されるべきです。メディチ家の復活に伴う自身の失職の最中に、マキアヴェッリはその著を、政治の世界に再度復帰するために、書きつづりました。しかし、メディチ家は彼を信用しませんでした。フェデリコ・シャボによれば、マキアヴェッリはメディチ家を驚愕させ警戒させました。なぜ

7) Larry May, *Limiting Leviathan: Hobbes and International Affairs*, Oxford University Press, 2013.

ならメディチ家は他のイタリア諸侯たちと同様に、イタリア統一の意思など少しも抱いていなかったからです。それどころか彼らは、外国の諸侯や君主たち、「野蛮人ども」を恐れていませんでしたし、むしろ逆に外国の諸侯や君主を必要としていました。[イタリア諸侯にとってイタリアの統一など、問題とするにも足りなかったのです。]なぜなら、彼らは自分の都市の地政学的な地位を、フランスやスペイン、イングランドに対して売りつけ[たり、実際に彼ら自身が商売人であった練達の外交官たちがそれをお手のものとしていたように、こうした国々との取引に勤しんでい]たからです。シャボによればマキアヴェッリは、決して練達の外交官ではありませんでした。彼はヴェネツィアの大使たちやフィレンツェの大商人のような能力が欠けていました。そのような点において彼は、ロベルト・アッチャイウォーリやフランチェスコ・グイッチャルディーニの足もとにも及びません。彼らは、偉大な商家の出身で、父祖の冷血さと打算の才を受け継ぎ、銀行の金銭と同様に自身の国家を弄ぶことにも練達の士であったのです。

『リヴァイアサン』が刊行された時ホブズは既に63才です。30年戦争、内戦、チャールズ1世の斬首、クロムウェルの支配、パリでの亡命生活、メルセンヌなど当代一流の科学者・哲学者たちとの交遊など、彼はさまざまな出来事を経験しました。それにもかかわらず、彼はジェームズ1世の時代の若きマキアヴェッリ主義者ホブズから、ほとんど変わってはいませんでした。J. P. サマヴィルが解き明かしたように、ジェームズ1世が唱えた王権神授説も、サー・ロバート・フィルマーの『パトリアーカ』の立場も、ホブズはほとんど支持していませんでした。

『リヴァイアサン』において彼は、国王が依然として国教会の首長に留まり続けるブリテンの国民国家の新たな基礎づけのために、契約と自然法に依拠しました。[ジェームズ1世が抱いたような]キリスト教世界の和解の計画は、30年戦争と1648年のウェストファリア条約の後の形勢を前に、もはや実現不可能なものとなりました。30年戦争の間に、スペインの勢力の衰退により当時の歴史的形勢が一変してしまっていたのです。ホブズが探究したのは国家に奉仕する宗教、古代ローマ人のそのような国民宗教でした。王党派であり君主政体の支持者であったホブズは、『リヴァイアサン』の1部と2部で、神は依然として科学ではなく信仰の対象であると断言しつつも、国家の理論を神学から分離し、「自然」や「法」、「契約」といった用語による政治的レトリックを基盤とすることが必要不可欠であると論じています。ホブズのマキアヴェリズムはイングランド人の抱える問題の解決を、『リヴァイアサン』の第3部と第4部において提示しているところにも現れています。そこではヘンリー8世とエリザベス1世が、教皇の下にある司教や司祭たちを追い払ったことにより礼讃されています。教皇はローマの皇帝たちからその権威を盗み取り、ローマ帝国の棺桶の上に座る、ローマ帝国の亡霊でした。ホブズによれば、ローマの司教や司祭たちは英語ではなくラテン語をしゃべっていました。『リヴァイアサン』の1部と2部においてホブズは既に読者を、第3部と第4部の読解へと準備させています。そしてこの部分こそが、イングランド内戦中に生じた歴史的変動に対して、洗練された戦略的な解答を提示する部分に他なりません。まさにこの時期において、新たな政治文

化が形成されてきたのです。どうもご清聴ありがとうございました。

安武：では15分間ほど、ここでブレイクを入れたいと思います。

(休 憩)

安武：それではシンポジウムを再開したいと思います。少し時間が押しております。木村先生の報告については、すでに日本語と英語の両方の配布資料がありますので、ここではコーリ先生の便宜を考えて、英語のみで木村先生にはお話しいただき、続けてコーリ先生から木村先生のコメントに対してお答えいただくという形でシンポジウムを進めていきたいと思います。

木村：ご紹介いただきありがとうございます。ホッブズ、ローマそしてマキアヴェッリについての見事なご報告を有難うございます。私は主として6点に分けてコメントしたいと思います。第一はマキアヴェッリとホッブズとの関係について、第二に共和主義とホッブズについて、第三に人文主義とホッブズとの関係、第四に思慮と科学 (science) との関係について、第五に古代ローマとアウグストゥスについてのホッブズによる注解について、最後にブリテン帝国とホッブズについてです。

1. マキアヴェッリとホッブズ

マキアヴェッリとホッブズという二人の「偉大な著者」を通じて、古代ギリシア・ローマ以来の西洋政治思想の歴史は大きく転換しました。レオ・シュトラウスやハンナ・アーレントによる研究にも見られるように、両者はとりわけ、近代政治思想や政治科学 (political science)、そして近代国家 (modern state) 理論の定礎者として理解されてきました。むしろ、これとは逆に、両者の相違を強調した議論もあります。たとえばホッブズの同時代人であるジェイムズ・ハリントン、『オシアナ共和国』(1656年)のなかで、マキアヴェッリを古代の思慮 (ancient prudence) と法の支配 (empire of laws) を回復させようとした唯一の政治家とみなし、ホッブズを、それらの破壊を企てた人物として批判しました。マキアヴェッリとホッブズは、古代から近代への転換点でもあり、分岐点でもあるのです。それゆえ、この両者の関係を理解することは、西洋政治思想史研究において最重要の課題の一つなのです。

コーリ教授の『ステュアート朝イングランドにおけるホッブズ、ローマ、マキアヴェッリ』は、1620年に匿名出版された『余暇』(Horae Subsecivae)におけるホッブズの「三つの論考」に着目し、新たなホッブズ像の提示を試みています。ここにその原著のマイクロフィルムからのコピーを持参しましたので回覧したいと思います。

コーリ：その『余暇』については、ブリテンの研究者の間で若きホッブズが執筆したものを巡って激しい論争がありました。そのうちの三つの論考だけがホッブズが書いた原稿である、とレオ・シュトラウスが指摘しました。アーリーン・サクソンハウス (Arlene Saxonhouse) と N. B. レイノルズ (Noel. B. Reynolds) の1995年の著作⁸⁾以降、今では「三つの論考」に関してはホッブズのテキストであると認識されるようになりました。クエンティン・スキナーは「三つの論考」が新しいホッブズ像を示したとしました。

安武：20世紀の末くらいから、ようやく注目を集めるようになったのですが、ホッブズが単に書いていただけではなくて、本当にホッブズの意図、ホッブズの執筆というふうに言えるかどうかをめぐっても議論がありました⁹⁾。

木村：さて、近年になって若きホッブズの作品であることが確定したこの作品は、「マームズベリーの哲学者とマキアヴェッリとの対話」と「古代ローマについての省察」を示したものです。コーリ氏はまた、マキアヴェッリとホッブズとの相違を認識しながらも、両者がともに、反カトリック主義と国家理性、そして古代ローマ崇拜という共通点を有していたことを指摘します。そのうえで、「タキトゥスの冒頭部分について」を扱った第8章では、ホッブズの古代ローマ理解が詳しく考察されることによって、彼が「マキアヴェッリ以上のマキアヴェッリ主義者」(più machiavelliano di Machiavelli) であることが主張されるのです。

もっとも、ホッブズを「マキアヴェッリ主義者」と理解するならば、どのような意味で「マキアヴェッリ主義者」なのかが問われることになるでしょう。コーリ氏は一方で、ホッブズと『君主論』との議論の相関に注目します。すなわち、「万人の万人に対する」戦争状態においては偽装が必要とされるのみならず、最も狡猾な狐と最も強力な獅子でさえも、最も弱い者の共謀によって打ち殺されるのです。他方でまた、コーリ氏は、ルソーの市民宗教論などとも共通する、『デイスコルシ』における宗教論を取り上げます。すなわち、マキアヴェッリと同様、ホッブズもまた、国家の理論を神学から切断したうえで、『リヴァイアサン』第3部と第4部において、宗教が国家に奉仕するような「新たな政治文化」を提示したのです。しかし、だとすると逆に、ハリントンの見解にもあるように、ホッブズをマキアヴェッリと決定的に分かつものは何か(何が「ホッブズの革命」なのか)改めて疑問が生じて来ます。この点はまた、後にも

8) 注1を参照。

9) この論争の紹介並びに、初期ホッブズのテキストや人文主義との関わりをめぐる研究動向については(サクソンハウスとレイノルズの1995年の著作以前の展開という限定は付くものの)、山本隆基「トマス・ホッブズの初期政治思想——自然法・情念・国家(1)(2・完)」『福岡大学法学論叢』第57巻1号、2012年6月、同巻3号、2012年12月が詳しい。この他、上田前掲論文や、藤本興「党争と情念——トマス・ホッブズにおける「幾何学への恋」以前の時代——」『慶應義塾大学大学院法学研究科 論文集』第55号、2015年、梅田百合香「ホッブズとトゥキユディアスの朗誦される歴史——ホッブズの後期著作の文体と朗読」『政治思想学会会報』第42号、2016年7月、同「ホッブズの『教会史 *Historia Ecclesiastica*』」『思想』第1130号、2018年等がある。

述べるように、マキアヴェッリが『デイスコルシ』で依拠したリウイウスと、ホブズが参照したタキトゥスとの違いとも関連してくるでしょう。

コーリ：あなたのコメントに対して詳細に答えるのは難しく、別の本を執筆する必要がありますね。まず「ホブズの革命」という表現は、ブリテンの国民国家モデルについてホブズがある面で定礎者であったという意味です。そして、貴方が正当にも言及したルソーは、ホブズから学びホブズについて論じ、批判しましたが、ホブズもルソーも、宗教が国家の一機能であって、宗教は国家と結びついているので、国家から独立しえないと考えていました。今日、ホブズやルソーの宗教観を眺めると、彼らはイスラーム原理主義者に類似しているかに見えます。なぜなら彼らは、宗教が国家と結びついた、共和主義的で帝国主義的なローマをモデルとして支持していたからです。ホブズは多くの著作で何度も、ローマにおいて皇帝が司教を任命し、その逆ではなかったことを引き合いに出しました。彼は、教皇の権力がヨーロッパの国王や国家、都市を除名し正統性を剥奪することと戦いました。我々が思い起こすべきは、1602年と1607年に、教皇がヴェネツィアに対し聖務停止命令を出したことです。ヴェネツィア共和国がカトリックの聖職者に対する支配を拡張したためです。ヴェネツィアに対する阻止活動では、スペインに対してヴェネツィアに圧力を加えるよう要請する形で、教皇の政治権力が示されました。他方でフランスのアンリ4世は、ヴェネツィアの側に立ちました。ルソーはマキアヴェッリやホブズ以上にカトリック教会を厳しく批判し、イングランド国教会の首長でもあったブリテン国王、ロシアのツァー、そして宗教的長が国家の政治的・軍事的長でもあったイスラームを支持する旨、記しました。ホブズやルソーにとって、宗教権力は政治権力から分離されえなかったのです。

私の本でも言及したジェイムズ・J・シーアン (James J. Sheehan)¹⁰⁾によれば、16世紀から19世紀にいたるまでに登場したヨーロッパにおける国民国家の各主権は、カトリック教会に対抗していました。このような事態が生じたのは、絶対君主が、スペイン、フランス、ブリテンなどで国民国家を設立し、複数の領域を統合したからです。その領域の中には固有の言語・慣習・伝統を異にする複数の古い住民がおり、キリスト教とその司祭のみを共にしていました。ヨーロッパの国王や君主たちにとって、国境を管理することが重要であったため、域内の司祭や司教を独自に任免することを求めました。君主たちは域内の司祭や司教がローマによって任命されることを望んでおらず、ラテン語ではなく、ドイツ語、英語、デンマーク語を話す自国の司祭や司教を望んでいました。君主たちはローマによって任命された司教を信頼しなかったのです。近代ヨーロッパはカトリックのローマの支配の下にあることを望まず、税を支払うことも、カトリックの信仰に服従することも望みませんでした。我々が考慮すべきは、教皇が軍事力を持っていなかったことです。つまりローマ教会は、軍事力によって世界を支配した共和

10) James J. Sheehan, "The Problem of Sovereignty in European History" in *The American Historical Review*, Volume 111, Issue 1, February 2006.

政期や帝政期のローマとは、異なっていました。ネイル・ファーガソンの言葉を借りれば、この軍事力という「決め手」を持っていたがゆえに、ブリテン帝国は、あれ程多くの国々と大陸を支配下に治めることができたのです。

ドイツにおけるプロテスタントの改革派も、北方ヨーロッパも、ブリテンも、[カトリックに対抗する] 政治的理由を持っていました。ローマ教会は、文化的・政治的な覇権を持ち、ヨーロッパの文化、教育、大学、外交活動などを支配していましたが、新しい科学的発見（ケプラーやガリレオ）を拒絶し、政治権力を求めていました。したがってローマ教会からの断絶は不可避でした。同様にマキアヴェッリは、イタリアの没落がイタリアにおけるローマ教会の権力と結びついていると、理解していたようです。

2. 共和主義とホッブズ

木村：マキアヴェッリとホッブズとの違いは、ポーコックやスキナーをはじめとする先行研究とコーリ氏の研究との関係にも絡んできます。周知のように、ポーコックは『マキアヴェリアン・モーメント』（1975年）において、1400年代のイタリアから17世紀のハリントン、そして18世紀のアメリカに至る共和主義の伝統を描きました。ポーコックはまた、『徳・商業・歴史』（1985年）のなかで、このような共和主義的な徳の言説と、ホッブズやロックに代表される法や権利を中心とする言説とを区別しました。他方でスキナーもまた、『近代政治思想の基礎』（1977年）や『自由主義以前の自由』（1998年）、そして『ホッブズと共和主義的自由』（2008年）において、ホッブズとは対照的な、共和主義のパラダイムを提示しました。

マキアヴェッリの古典的共和主義とホッブズの近代政治学とを対比させてきたこれらの研究を、コーリ氏はどのように評価し、批判するのでしょうか。ホッブズ自身も、『市民論』から『リヴァイアサン』、そして『ビヒモス』に至るまで一貫して、内戦や抵抗論を引き起こした主要な原因の一つとして、アリストテレスやキケロなどの古典古代の著作を挙げています。コーリ氏は、共和政の柔弱さを批判するホッブズの議論から、彼が『君主論』や『ディスコルシ』を「熟知」しており、「暗々裏に批判」していたとの判断を示します。しかし、だとすればなおさら、ホッブズは逆に、(有名なフランチェスコ・ベットーリ宛の書簡にあるような)「古の人々が集う古の宮廷」で古典を読むような「マキアヴェッリ主義者」を強く批判するのではないのでしょうか。いずれにせよ、ホッブズを「マキアヴェッリ主義者」として理解するならば、同時にまた、マキアヴェッリの政治思想の解釈 (*The English face of Machiavelli* と *The Machiavellian Moment*) を見直す作業が避けられないでしょう。

コーリ：非常に見事です。私見では、ポーコックの1970年代のマキアヴェッリについての著作¹¹⁾

11) コーリ教授によれば、ポーコックのマキアヴェッリ研究は、1960年代の西洋研究に立脚した西洋文明と結びついている。アテナイやフィレンツェを媒介にして普及した民主政治とともに、マキアヴェッリの『ローマ

によって、マキアヴェッリとアメリカとの関連付けについて、新しい時代が始まり、アメリカ合衆国、ブリテン、フィレンツェ（ローマ）、そしてイタリアが結び付けられました。私にとってそれは、70年代の西欧と大西洋世界との偉大なイデオロギー的統合です。私自身は、フェリックス・ラブ（Felix Raab）の『マキアヴェッリの英国での顔』（1964年）¹²⁾の方を評価します。なぜなら、アメリカ建国の父達にとって、またブリテンや名誉革命に際して、マキアヴェッリが重要であったり、影響力があったりしたとは思えないからです。ヴィクトリア・カーン（Victoria Khan）が『マキアヴェッリの修辞学：反宗教改革からミルトンまで』（1994）¹³⁾においてポーコックの『マキアヴェッリアン・モーメント』を批判しています。彼女によれば、マキアヴェッリはイングランドでよく知られてはいましたが、17世紀のブリテン政治には影響力がありませんでした。なぜなら、イングランドでの思考は、契約の概念や自然法に焦点を当てていたからです。イングランドの論争は、共和国を樹立することを目指したのではなく、契約や自然法に基づいた社会を構築することにあります。ホブズが契約や自然法を用いたのは、リヴァイアサンを樹立するためでした。ポーコックの共和主義において重要であった徳は、ホブズにとって重要ではなく、むしろ利益や情念が重要でした。つまりイングランドの内乱から名誉革命にかけて、ブリテンの議会は、カトリック諸国と対抗するためにプロテスタント諸国との同盟を望んでいました。それは政治・経済的理由に基づくもので、単なる宗教的理由に基づくものではありませんでした。内乱期において（1642年6月にヨークにおいてチャールズ1世に対しイングランド議会在提示した19ヶ条の提案を見ると）この同盟が、スペイン帝国を打倒し、アメリカでのスペインの伸長の阻止を求めるものだったことは、明らかです。この19ヶ条提案において議会在国王に求めているのは、王族関係者がカトリックと結婚しないことでした。そして2015年に至るまで、ブリテンの王族はカトリックと結婚できなかったのです。しかしイングランドの共和政期に、オリヴァー・クロムウエルは、英蘭戦争（1652-1784年）を開始しました。オランダはプロテスタントの共和国でした。第三次英蘭戦争（1672-1674年）において国王チャールズ2世は、ルイ14世のカトリック・フランスと同盟を結び、オランダ共和国を攻撃しました。ジョナサン・イスラエル（Jonathan Israel）が『オランダ共和国：その盛衰1477-1806年』¹⁴⁾において示したように、ブリテンによる英蘭戦争の終焉によって、オランダのアジアにおける商業的優位も、神話的なVOC、オランダ東インド会社や西インド会社とも

史論』が非常に重要視されたのは、当時、ローマがタブー視されていたためである。イタリアのファシストがローマの神話に立脚しており、ローマがファシズムを意味していた。ローマはブリテンにとっての神話でもあったし、ムッソリーニはユリウス・カエサルのような力量を欠いていた。このような文明をめぐる観念が、NATOと結びついてヨーロッパで、中東で、アフリカやアジアで展開した。ここでコーリ教授は、後出のニール・ファーガソンが西洋文明モデルを、皮肉を込めて展開している点に着目している。注17も参照。

12) Felix Raab, *The English face of Machiavelli: A Changing Interpretation, 1500-1700*, Routledge & K. Paul, 1964.

13) Victoria Khan, *Machiavellian Rhetoric: from Counter-Reformation to Milton*, Princeton University Press, 1994.

14) Jonathan Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness and Fall, 1477-1806*, Clarendon Press, 1995.

に、終焉しました。オランダ共和国の打倒によって、オランダ東インド会社は、ブリテンの東インド会社となり、オランダはアジアにおける自国の市場を失いました。アジアの人々がオランダに好意的だったのは、改宗を試みなかったからであることも我々は思い浮かべるべきです。したがって、ブリテンは至高の地位を追求しましたが、それは宗教問題のためではなかったと言えます。『リヴァイアサン』の中でホブズは、ヴァージニアの最初の入植を祝福し、イエズス会士の中国における展開への懸念で結んでいます。したがって、ホブズにはブリテン帝国についての観念があり、ブリテンの国民的アイデンティティを構築しようとしたと言えるでしょう。このアイデンティティは、ローマ教会との断絶、英語を解さずラテン語を話すローマの聖職者のブリテンからの追放と結びついていました。したがって、ホブズはマキアヴェッリ以上に (machiavellico という意味で) マキアヴェッリ主義者であったと言ってよいでしょう。なぜなら、彼はブリテンの国民的アイデンティティを真に構築し、自らのリヴァイアサンを打ち立てるのに、契約と自然法を用いたからです。

石黒： 一点だけ補足しておく、彼女は元からの持論でマキアヴェッリそのもののクリエイティブイミタビリティについて非常に疑問を常に呈しているのです。要するに、マキアヴェッリの価値というものは、マキアヴェッリそのものが持っている価値ではなくて、マキアヴェッリを後世がどういうふうに見ていったかというところにある。マキアヴェッリそのものというよりも、マキアヴェッリを通じて、例えばホブズが何を考えたかが重要であって、その中で、マキアヴェッリが全然表立っては議論していない社会契約とか自然法とかを、ホブズがどういうふう考えていたかを見るということの方が、「マキアヴェッリ以上のマキアヴェッリ主義者」というものを考えていく上では重要な点なのだと思います。

3. 人文主義とホブズ

木村： とくに若い頃のホブズが人文主義の影響を強く受けていたことは、シュトラウスやスキナーらによって繰り返し指摘されてきています。ホブズ研究においては以降、「三つの論考」に加え、ホブズがトウキユディデス『ペロポネソス戦史』英訳版(1629年)を出版し、アリストテレス『弁論術』の翻訳(1637年)に関与したことの重要性を見逃すことはできません。ただし、このことは一方で、ホブズが、マキアヴェッリのみ還元されない、より広い人文主義的な同時代の知的コンテクストのなかで思考していたことを示唆するようにも思えます。なお、ここでは「人文主義」の概念を広義に理解し、古典古代を模範とし、文法・レトリック・詩・歴史・道徳哲学を基礎として成り立つ知的伝統を意味する言葉として用いたいと思います。したがって、それは特定のイデオロギーではなく、市民的人文主義(civic humanism)や共和主義、あるいはキリスト教人文主義や宮廷の人文主義なども包括するものです。

さて、このようなホブズと人文主義との関係を示す例を挙げれば、たとえば『ペロポネソス戦史』英訳版において彼は、この時点ではまだ、ホメロスの韻文、アリストテレスの哲学、

デモステネスの弁論といった古典古代の学問が優れていることを認めていました。しかも、ホップズによれば、「歴史の主要にして固有の任務」は「過去の行為を知ることを通じて、現代においては慎重に (prudently)、未来に向かっては先見の明を持って振舞うように、人々を導き、そのように可能ならしめること」にあるのです。このような人文主義に典型的な歴史観を示したうえで彼は、同時代に広く読まれたリプシウスの『政治学』を参照するなどして、トゥキュディデスを理想的な歴史家として称賛したのです。

ルネサンス期の人文主義についてはまた、ピーター・バークやリチャード・タック、マルック・ベルトネンらの研究にもあるように、タキトゥスを含めた歴史書の受容、リプシウスに代表される新ストア主義や政治的思慮の議論、そして同時代のジェントルマン教育におけるレトリックの役割といった主題も浮かび上がってきます。そして、なかでも、マキアヴェッリとホップズの両者を結びつける重要な結節点となるのが、フランシス・ベイコンでしょう。ホップズが秘書を務めていたこともあるベイコンは、「人は何をすべきか」ではなく「何をするかを記した」マキアヴェッリを例外的に高く評価し、他方でトゥキュディデスとリウィウスを薦めるだけでなく、「あらゆる歴史物語」のなかでタキトゥスを「端的に最善」としました。このように、人文主義の多様な知的コンテクストへと視点を広げることで、近代科学の影響を受ける以前のホップズ政治思想の基礎がよりよく明らかになるでしょう。

コーリ：ベイコンや人文主義とホップズとの関連に関心を持っておられるのですね。確かにホップズはトゥキディデスの『ペロポネソス戦史』を翻訳しました。ホップズによれば、トゥキディデスの本を翻訳したのは、民主政がいかに危険であるかを示すためでした。そして、この本は英語圏で有名となり、文化・政治の面でブリテンからの影響下にあったアメリカ合衆国にも及びました。我々が思い起こすべきは、アメリカ合衆国が共和政ではあっても、アメリカでは19世紀に至るまで、民主政が無政府状態と同義で、現在とは事情が異なったことです。英語圏の人々は、アテナイの終焉、フランス革命〔と同様の事態が生じること〕を懸念しており、合衆国もブリテンもローマ共和政を神話として持ったのです。アーリー・サクソンハウスは『アテナイ民主制：近代の神話創造と古代の理論家たち』(1996年)¹⁵⁾において、オスマン・トルコからのギリシア独立闘争をブリテンが支援してから、事態は変化したと説明しています。同じ時期に、ブリテンはイタリアの統合も支援し、イタリアの国民的英雄、ガリバルディによる南イタリアの有名な「解放」を、資金面と王立海軍によって支えました。ブリテンがイタリアの統一運動を支持したのは、中東やアフリカでのフランスとの競合や、地中海の支配の必要性のためでした。ブリテンがギリシアの独立を支援したのは、バルカン半島においてオスマンが支配するヨーロッパが存在したからです。つまり、ブリテンはバルカン半島(東ヨーロッパ)でのオスマン帝国を分解させるために、ロシア帝国を助けたのです。突然、ギリシアとギリシア

15) Arlene W. Saxonhouse, *Athenian Democracy: Modern Mythmakers and Ancient Theorists*, University of Notre Dame Press, 1996.

史がブリテンの文化の中で非常に重要なものとなり、民主主義もまた再考されるようになり、以上のは、地政学的で、文化的でイデオロギー的な活動（operation）でした¹⁶⁾。アメリカ合衆国はこのプロジェクトを支援し、1824年に「民主」共和党が分裂し、1828年にジャクソンの運動が民主党となり、1844年には民主党が正式名称となります。ニール・ファーガソンが『文明：西洋と残余』¹⁷⁾で想起したように、第二次世界大戦後の西欧文明の概念がアテナイとフィレンツェとともに始まったことを我々は思い浮かべるべきです。いずれにせよ、第一次世界大戦の間に、ドイツやオーストリア帝国と同盟を組んだオスマン帝国は打倒され、ブリテンとフランスが、崩壊したオスマンをサイクス・ピコ条約によって分割しました。そして第二次世界大戦までアラブを支配し、1956年にアメリカとロシアが、中東とアフリカにおける軍事力として、ブリテンとフランスにとって代わりました¹⁸⁾。

ホブズ、アリストテレス、キケロについて応答しておく、ホブズはアリストテレスやキケロの修辞学にも学びましたが、男であれ女であれ、社会的動物と考えなかったために、人間本性を社会的動物と捉えるアリストテレスの理論に反対しました。男女を問わず人間がリヴァイアサンに加入するのは、自然状態において何時でも殺されかねず、最強の男ですら殺されるからです。死への恐怖から、男女ともに契約によってリヴァイアサンに加入するわけです。ホブズは、『ビヒモス』と『リヴァイアサン』において、キケロを内乱勃発の原因となった人物の一人と考えていました。リンダ・レヴィ・ベック（Linda Levy Peck）や、イングランド内乱期についてのブリテンの歴史家の何人かが指摘するように、自由について語り暴政と戦ったキケロを、人々は学び、革命家となりました。『リヴァイアサン』においてホブズは、古典書が誤解され革命や内乱の原因となっているとして、禁止すべきであると主張しました。16世紀、チューダー期イングランドでの改革により、大学が変容し、大学を独占していたカトリックが追放され、新しい教師が古典研究を導入し、キケロのように自由について語り、暴君と腐敗に対して戦った人物を研究しました。『ビヒモス』においてホブズは、長老派の聖職者に言

-
- 16) コーリ教授によれば、当時、バルシャ帝国に対抗するマラトンの戦いも脚光を浴びるようになった。J. S. ミルは、1846年に「マラトンの戦いは、ブリテン史における一事件とした場合ですら、ヘイスティングズの戦い〔ノルマン征服〕よりも重要であった」と記した。J. S. ミルは、ジョージ・グロートの『ギリシア史』（1846年）の書評もしている。J. S. ミルはまた、ブリテンの東インド会社に、その解散の時期まで勤め、文明人と野蛮人との間に根本的な違いがあることを主張することでブリテンの帝国主義を擁護した。インドや中国を、一度は発展的な時期を経たが、今や停滞し野蛮になってしまったとし、慈愛に満ちた専制として、ブリテンによる支配を正当化したのである。
- 17) Niall Ferguson, *Civilization, the West and the Rest*, Penguin Press, 2011 [『文明：西洋が覇権をとれた6つの真因』仙名紀訳、勁草書房 2012年]。
- 18) オスマン帝国軍とブリテン軍との戦いについては、Kristian Coates Ulrichsen, *The First World War in the Middle East*, Hurst & Co Ltd, 2014、ブリテンとフランスとの中東における競合関係については、James Barr, *A Line in the Sand: Britain, France and the Struggle for the Mastery of the Middle East*, Simon & Schuster, 2011、中央におけるブリテンとアメリカの同盟から敵対関係への変化については、James Barr, *Lords of the Desert: Britain's Struggle with America to Dominate the Middle East*, Simon & Schuster, 2018をコーリ教授は参照している。

及し、彼らが都市にやって来て大広場で説教し、国王があたかも暴君であるかのように、暴君に対抗する言説を展開したとしました。こうして歴史家リンダ・ベックによれば、キケロはイングランドの内乱の原因の一つとみなされ、どの革命もキケロとともにありました、なぜなら長老派もピューリタンも、国王と宮廷の腐敗を糾弾していたからです。しかし、彼女の見解によれば、17世紀のイングランドは腐敗の度合いで18世紀と大差ありませんでした。ホップズの『リヴァイアサン』において、国家は、書物、学生そして言葉を統制しなければならぬ、とされました。国家は古代の著述家、例えばキケロを廃絶しなければなりません。『リヴァイアサン』はこの点で何度も批判されてきましたが、どんな政治制度にもそれ固有の検閲制度が伴うもので、それはホップズだけが生み出した制度ではないのです。

フランシス・ベイコンについては、今回扱っていませんが、非常に興味深い知識人で、自然科学者でもありましたが、ホップズとは非常に異なっていました。ベイコンはまた、外交的仕事においても非常に重要でした。スペイン大使宛の書簡を見れば分かりますが、カトリックのイングランドにより良い位置を得させようとしていました¹⁹⁾。それに、彼は人文主義者であり、文明人であり、文化と学問の人で、パオロ・サルピのヴェネツィアでの友人であったフルゲンツィオ・ミカンツィオにとって重要人物でした。ヴェネツィアは教皇との間に問題を抱えていました。しかしホップズはベイコンとは異なり、科学と物理学に立脚した理論体系を持っていました。リンダ・レヴィ・ベックが描写したように、ベイコンはイングランド史の別の時代に属していました。ホップズのブリテンは、それとはまったく別の時代にあり、政治的・社会的・宗教的闘争、内乱、アメリカにおける植民地、取引市場などを伴い、それが近代ブリテン国家の現実となっていくのです。

石黒：補足しますと、マキアヴェッリとホップズを比較する時にも、彼女は繰り返し「違う時代なのだ」ということを強調します。マキアヴェッリの時代の人文主義や修辞学に基づいた非体系的な志向の時代から、ホップズは人文主義の教義みたいなものの中から出てきたのだけれども、でもやはりそれと違う理論的な構築を自分の思想のベースに置いている。そこがやはりマキアヴェッリとホップズの違いでもあるし、ベイコンとホップズの違いでもあるという、そういう風にまとめられると思いました。

安武：当時のブリテンに転換点を見ている訳ですね。

19) コーリ教授によれば、フランシス・ベイコンは、ローマ教会と戦ったことで有名であるが、彼はスペイン大使のゴンドマル対して、ジェームズ1世のために、国王がカトリックの中でブリテンが良い地位を得ることを望んでいる旨、記した。当時、ジェームズ1世は、息子(後のチャールズ1世)をスペイン王女と結婚させることを望んでいたためである。ジェームズ1世は1604年にスペインと和平を結び、神聖ローマ帝国の皇帝がスペイン・ハプスブルグ家(オーストリアも支配)から出ていたこともあり、この婚姻を望んだのである。最終的にはスペイン王女が結婚を拒否したが、スペイン王女との縁談を模索したこの時期は重要であり、チャールズはスペインにも赴いていた。Coli 前掲書、p.56。

石黒：帝国という表現もありましたが、エリザベス朝時代の社会構造、都市社会の構造と、ステュアート朝時代の都市社会や宮廷の構造が何か一見連続しているようでやはり変わっている。そういったコンテキストの中で、それぞれの人は活躍しているということだと思います。

コーリ：もう一つ加えたいのですが、17世紀には文化と学問の中心としてのイタリアの没落が始まります。1689年までであれば、ブリテンの学生は、イタリアに赴きパドヴァで医学を学んでいたのですが、名誉革命後のブリテンに王立協会のようなアカデミーが開設されたために、イタリアには学びに行かなくなりました。確かにイタリアは依然として美の国ではあり、ブリテン人はイタリアを訪れはするのですが、それは、観光と美術品の購入のためであって、学問のためにわざわざ留学することはなくなっていったのです。

石黒：ホッブズは違う知的なコンテキストの中で生まれてきたということは、確かに重要なポイントかもしれないですね。

4. 思慮と科学——「タキトゥスの冒頭部分について」

木村：ベイコンとホッブズ、マキアヴェッリとホッブズとの関係と同様の問題が、若い頃のホッブズとその後のホッブズとの間にもありそうです。さて、人文主義のコンテキストに照らし合わせると、「三つの論考」について何が新たに見えてくるのでしょうか。たとえば、ベイコンの『政治道徳論集』1598, 1612, 1625と形式と内容が類似する『余暇』のなかで、「三つの論考」を、「傲慢」や「野心」や「カントリ・ライフ」などを主題とする他の12のエッセイや「追従論」と併せて読むと、ホッブズや、彼のパトロンであるキャベンディッシュ家を取り囲んでいた知的な背景や政治的な状況が見えてくるのではないのでしょうか。あるいは、「タキトゥスの冒頭部分について」だけに限定しても、ホッブズが、当時のヨーロッパの宮廷社会で広く読まれていたタキトゥスの『年代記』を改めて取り上げたのはなぜか。また、議論の対象を、『年代記』の本題である第二代皇帝ティベリウス以降の治世の記述が始まる前の、冒頭部分に限定したのはなぜかといった疑問も湧いてきます。

なかでも、「タキトゥスの冒頭部分について」が、『市民論』や『リヴァイアサン』といった以降のホッブズ政治哲学（civil philosophy）の形成にどのように関与していたのかは、一つの大きな論点になるでしょう。このことはとくに、リプシウスやベイコンにとって、タキトゥスが政治的思慮（political prudence）の宝庫とされていたことを考え合わせると、アリストテレス以来の古典的な政治学から科学的な近代政治学への転換を理解するうえでも避けられない問題になります。これに対して、ホッブズは『リヴァイアサン』のなかで、経験に存する思慮を哲学の一部分でないとし、推論によって得られる科学（science）とは明確に区別しました。のちの『物体論』（1655年）のなかで、自身の『市民論』より前に政治哲学はないと言い切るに至ったホッブズにとって、タキトゥスは読み継ぐべき政治学の古典であり続けたのでしょうか。

コーリ：非常に興味深く極めて洗練された観察だとおもいます。多くの点で、タキトゥスやトゥキディデス、さらに思慮についてのあなたの説明は正しいと思いますし、思慮の哲学は変わりました。そして確かに、リプシウスやベイコンによって、タキトゥスは政治的思慮の宝庫と見なされました。我々はタキトゥスについて様々に語ることができますが、ここではホッブズにとってのタキトゥスについてコメントします。「タキトゥスの冒頭部分」をホッブズが選択したのは、彼がアウグストゥスに関心を持っていたからです。アウグストゥスは、ローマの内戦を終わらせ、ローマを平和にし、ローマ帝国を樹立しました。ホッブズが若い頃、タキトゥス論を執筆した際、ブリテンには内乱は発生していませんでしたが、国王ジェームズ一世は議会との間に深刻な問題を抱えており、1605年には「カトリックが首謀したとされる」火薬陰謀事件が発生しました。ホッブズは内乱を恐れていたのです。

思慮について、確かにホッブズにおいて思慮は哲学の一部ではありません。しかしそれは、ホッブズにおいて認識論の大革命があったからです。またホッブズにとって理性とは ratio, calculation のことであったことを、我々は思い出さねばなりません。思考とは計算なのです。通常、私は学生に ratio を次のように説明します。もしある学生が車を欲しているがお金がない場合、その学生はその目標を獲得するのに何が出来るのかを計算し始める。学生にはお金が必要だし、アルバイトの仕事を見つけようとするかもしれない。そして学生は必要なお金を獲得するのにどれだけの時間働く必要があるのかを計算するだろう、等々。ここで計算が始まるのは、学生が車を欲するからです。そしてホッブズにとって、願望、情念、利益は、計算や思考にとって鍵となります。またホッブズにとって、我々が思考したり計算したりできるのは、我々のみがこの世において言葉を持つ動物だからです。我々が思考できるのは、我々が名辞を持っているからで（ホッブズは唯名論者で、ブリテンの哲学は中世的論理と結びついています）、名辞は「記憶の記録（notes of memory）」です。したがって我々は、思考するとき、名辞を計算しているのです。[これに対して]ヨーロッパ大陸の哲学は非常に異なります。デカルトにとって我々は神によって与えられた生来の観念を有しています。我々は、物質的世界には存在しない抽象的な幾何学的対象を思考することができます。ちょうど三角形について、我々の心の中に神が三角形の観念を植えつけたように。デカルトの哲学は形而上学で、ホッブズとデカルトはそれぞれ別の伝統を見出したのです。ブリテンの世界で、全てのブリテンの哲学者が無神論者というわけではありませんでしたが、哲学と科学は分化し、科学は神学と宗教から別れました。

大陸ヨーロッパでは、啓蒙からカントやヘーゲルに至るまで、キリスト教の世俗化があり、形而上学が非常に重要です。レオ・シュトラウスが語ったように、哲学がキリスト教という宗教を打倒したのは、キリスト教がユダヤ教やイスラームのような戒律に立脚せず、（アウグスティヌスやトマス・アクイナスのように）神学ないしは哲学に立脚していたからです。そして近代の哲学は、新しい科学的発見がスコラ主義を危機に陥れてからは、宗教に取って代わりました。大陸ヨーロッパの哲学はキリスト教の世俗化であり、19世紀においてヘーゲルがとても支配的であったので、実証主義もまたヘーゲルの影響を受けました。観念論やロマン主義は19-20

世紀の大陸ヨーロッパで支配的ですが、これらの世紀のイデオロギーもまた、政治的ロマン主義の一形態なのです。大陸ヨーロッパの哲学者は、科学的進歩が人間本性を変えると考えており、ホブズはこれとは対照的に、科学の進歩は人間本性を変えないと考えました。『資本主義の文化的矛盾』におけるダニエル・ベルと同様、ホブズは、科学の進歩が男女を問わず人間の基本的な衝動、情念、願望、感覚を変えることはない、と考えました。大陸ヨーロッパの文化は観念的ですが、同時に現実的であり、ヘーゲルにとって現実的なものは合理的なのです。

大陸ヨーロッパにおいてホブズは、ビスマルクの死後、国家の新しい国制論的な側面をめぐるドイツでの論争の頃に、フェルデナンド・テンニースによって再発見されました。それ故に、シュミットやレオ・シュトラウスのようなホブズ研究者によるドイツの伝統が存在します。大陸ヨーロッパにおいてホブズが発見されたのは、第二次世界大戦後になってからのことであり、退屈な反動とみなされました。同様の評価はクエンティン・スキナーによっても下され、彼はマキアヴェッリを研究する方がよいと主張しました。ヨーロッパでは、ヘーゲルやハイデガーと並んで、マルクス主義が長年に亘って支配的哲学でした。ある意味で、大陸ヨーロッパの哲学は、アメリカ合衆国をも征服し、アメリカではブリテンの分析哲学が放棄されたのです。ドイツのユダヤ人がアメリカへと移民したことで、アメリカ文化が変容し、ドイツ系ユダヤ人は大陸ヨーロッパの文化を合衆国に導入したのです。キッシンジャーのリアル・ポリテイクをビスマルクについて考察すること抜きに考えることは困難です。キッシンジャーによれば、「ビスマルクはロマン主義者でヒトラーはロマン主義的なニヒリストだった」のであり、「ヒトラーは真空を残し、ビスマルクは壊滅的な敗北を克服できるだけの十分強い国家を残した」のです。

安武：大陸における認識論のあり方とイングランドとでだいぶ違うということですね。ホブズが「ラティオ」や「カルキュレーション」という言葉を使っているとしても、それらは、本当に大陸的な意味での science に相当するものなのかどうか。ここは私の解釈が入ってしまうのですが、ある種の prudence が読み込まれているということのようですね。

石黒：例えば彼女が言っていた、いわゆる「ラティオ」の動かし方というのは、いわゆる修辞学のいろいろな文章の構成術のようなものの方法にとってもよく似ていたので、「ああ、そういうことかな」と私は個人的に思っていました。やはり人文主義的なカルキュレーションの考え方のようなもので、デカルトにつながっていくような数学的なものと違うようなものが次の経験論につながっていくのかなと思います。そういう伏線のようなものがホブズの関心にはあるということでしょうか。

安武：時間が押していますので、木村さん、次の二つの論点をまとめてお願いします。

5. 古代ローマとアウグストゥスをめぐって

木村：さて、「タキトゥスの冒頭部分について」に戻りますと、そこでの重要な二つのトピックは、共和政 (res publica) から帝政 (imperium) への移行と、それを可能にした「新君主」アウグストゥスの評価です。リウィウス『ローマ建国史』に基づき、自由とヴィルトゥによって成立した共和政ローマを主な対象とするマキアヴェッリに対し、ホップズは、その共和政ローマの崩壊からアウグストゥスによる支配権の確立と帝位の継承を記した『年代記』の冒頭部分に注釈を加えます。『ディスコルシ』が仮に共和主義の古典だとすると、「タキトゥスの冒頭部分について」は、どのようなコンテクストのなかに位置づけられるのでしょうか。このような観心からは、近年、君主主義や王党主義、宮廷文化、あるいは、以下でも述べるような帝国論の見直しが進んでいることも見逃さないでしょう。初期近代ヨーロッパにおける政治の中心は君主と宮廷でした。「タキトゥスの冒頭部分について」は、共和主義のみならず、ジェームズ一世の王権神授説やフィルマーの家父長制論とも異なる、君主政国家や宮廷社会を舞台とした、もう一つの「マキアヴェリアン・モーメント」を示す作品の一つとして理解できるのでしょうか。

ホップズはまた、アウグストゥスを「統治の技術」(art of government) の「学識あるマスター」として高く評価します。ホップズによれば、「統治の主要な技術」は「時と場所と人に順応する技術」であり、「節度ある交際」や「正当な理由から感情や目的を抑えて隠す能力」のことを意味しました。アウグストゥスは、このような統治の技術を駆使して兵士や民衆の心をつかみ、急ぐことなく、時間をかけて継続的に任務を遂行することによって「自由国家を君主政へと転換させ」、「現状の国家を維持し」、「内戦を回避した」のです。このような、時には偽装や欺瞞も容認する統治技術論は、マキアヴェッリのみならず、タキトゥスを受容したリプシウスやベイコンなどの人文主義者によって再生産されてきました（ただし、マキアヴェッリはアウグストゥスをどう評価したでしょうか？）。これに対して、自然法論や主権論などが展開されたホップズの『市民論』や『リヴァイアサン』のなかでは、統治の技術への言及はほとんど見られません。「タキトゥスの冒頭部分について」におけるアウグストゥス論や統治技術論は、以降のホップズの作品において斥けられるのでしょうか、それとも、彼の政治学の体系のなかに最初から織り込み済になっていたのでしょうか。

6. ブリテン帝国におけるホップズ

少なくとも若きホップズにとって、古代ローマは「偉大さ」(greatness) を獲得した「帝国」(empire) であり、アウグストゥスは「全帝国の絶対的な主権」を有していました。その一方で、同時代のイングランドに目を向けると、コーリ氏も指摘するように、ホップズは『リヴァイアサン』第19章において、ジェームズ一世を「われわれの最も賢明な王」として高く評価します。なぜなら、ジェームズは、「政治の本当の諸規則」(the true rules of Politiques) を知る古代ローマ人と同様に、イングランドとスコットランドとの統合を目指したのであり、それが

成功していれば、おそらく内戦を防ぐことができたからでした。ホッブズはまた、『ビヒモス』のなかで、「多くの国々の支配者」であったローマ人を念頭に、「イングランド人もスコットランド人も、互いを外国人と呼び合うのは間違っていると思う」とも述べています。そして、コンラッド・ラッセルやジョン・モリルらによる最近の研究成果を参照するまでもなく、『ビヒモス』は実際に、当時の「内」戦を、イングランドとスコットランド、そしてアイルランドの「三王国」の間の戦争として描いたのです。

これらの発話は、近代国家の理論的な定礎者としてホッブズを単純に理解することはできないことを示しています。コーリ氏によれば、古代ローマは「帝国を夢見るイギリスのモデル」になりました。近年の研究ではまた、ポーコックやアーミテイジらによって、同時代のイギリスが、一元的な権力と均質的な国民を有する国家ではなく、ウェールズやスコットランド、アイルランド、アメリカなどの植民地を包括する「複合的」(composite) もしくは「多元的」(multiple) な「ブリテン帝国」(British empire) であったことが認識されるようになっていきます。「タキトゥスの冒頭部分について」における古代ローマ帝国への着目は、ジェームズと同様にホッブズもまた、複数のリヴァイアサンやビヒモスが生存競争を繰り広げる世界に生きていたことを示しています。

近年では他方で、マキアヴェッリの政治思想もまた、近代国家の理論や共和主義に限られず、このような帝国の観点からも理解されるようになってきています。彼は『ディスコルシ』の冒頭部分からすでに、「ローマの草創がどのようなものであったか」を知れば、ローマが豊かなヴィルトゥを保ち、共和国から帝国へと発展したことも驚くにあたらないと述べていました。また、なかでも注目されるのは、『君主論』の第3章から第5章と、『ディスコルシ』の第2巻でしょう。前者においては、まさしく混合型君主国の事例と征服の方法が記述され、後者では、現状維持国家のスパルタやヴェネツィアとは異なる、ローマによる拡大の方法が論じられたのです。

コーリ：貴方の指摘は正しく、ホッブズはアウグストゥスを称賛したのは、彼が嘘をつくことができ、自分の思考と願望を隠すことができたからです。アウグストゥスはホッブズにとって理想的な君主であり、不可解な人物 (sphinx) と目されていたスコットランド国王ジェームズ6世にしてイングランド国王ジェームズ1世に好意的でした。ジェームズがカトリックの殉教者、メアリー・スチュアートの息子であり、イングランド国王となったことを考慮すれば、彼が非常に狡猾であったと考えることができるでしょう。イングランド国王になる前、ジェームズは教皇に対して自らの保護を要請する書簡を書いています。彼は知識人であり、王権神授説の理論家であり、カトリックであれプロテスタントであれ、過激派の排除を望んでいました。戴冠にあたって彼はローマ皇帝のシンボルを選びました。そしてイングランドはヴァージニアに入植していましたので、ロンドンでは帝国の夢と力への意思がありました。ホッブズはローマ帝国を称賛し、ブリテン人はローマ史を学び、ラテン語を習いました。ローマ帝国はブリテン帝国にとってのモデルでもありました。ブリテン人はローマ帝国から、被征服民の宗教や慣習を

変えないことを学んだのです。イエスに死刑を求めたユダヤの宗教的権威者を前にしたポンテオ・ピラトの振る舞いは、死去した夫のために未亡人が自殺するインドの伝統を決して禁止しなかったインドにおけるブリテンの統治者の振る舞いと違いがありませんでした。ローマであれブリテンであれ、統治者の主たる狙いは、反乱を回避することだったのです。スコットランドの歴史家であるニール・ファーガソンは、イラク戦争におけるアメリカの侵攻を批判し、アメリカ人はローマ史を十分に読み込んでいなかったが故に、イラクに民主主義を輸出しようとしたと主張しました。ローマ人からブリテン人は、分割統治の戦略をも学びました。ローマ人と同様、ブリテン人はその帝国における様々な民族・宗教集団や国々間の紛争を引き起こしました。その目標は、ローマ帝国だけが平和を維持しえたことを示すことにありました。ヴィルフред・パレートは1916年に、ブリテン人が最後のローマ人であると記しました。ブリテン帝国は第二次世界大戦後に終焉し、ローマ帝国の終焉とは非常に異なる終わり方をしました。ローマ帝国の遺産はローマ教会であり、教会は何世紀にも亘ってヨーロッパを支配しました。教皇制はローマ帝国の延長、没したローマ帝国の亡霊であるとホブズが記したように、ブリテン帝国の遺産は、世界における英語の支配にあり、それは我々の時代におけるラテン語であり、言語は非常に重要なのです。

初期近代ブリテンが近代国家でも一元的な権力と均質的な国民を有する国家でなかったという、ポーコックの指摘についてですが、アメリカの歴史家、シーアンが書いた論文について先に言及しました。中世の分権的社会が、近代になって、15世紀以来スペインが最初に近代国家となりますが、ホブズ流の国家のように組織されていませんでした。ホブズの国家は理論上のもので、理論と実態との間には根深い乖離がありました。しかし、将来における現実、ホブズの理論の通りになったわけです。このように中世から近代にいたる興味深い過程がありました。確かにあなたの指摘は全く正しいのですが、我々は理論と現実との違いを自覚しなければなりません、ホブズは内乱やフランスの宗教戦争という現実を見据えたうえで、理論を構築したのです。

安武: 当時も今もそうだけれど、「複合的な」「多元的な」国家としての、複数のリヴァイアサンやピヒモスが生存競争を巡ってある種ぶつかり合っている世界の現実に、ホブズも直面していたのだが、問題は理論と現実をどう区別するかであって、あえてそのような現実に対して統合を志向する国家のモデルを出そうとした、ということですね。すみません、時間が非常に限られていますので、木村さん、最後の箇所をお願いします。

木村: マキアヴェッリとホブズの政治思想は、近代国家の形成というよりも、同時代における帝国や征服、あるいは複合国家の問題に実践的に取り組んだ例としても理解できるでしょう。たとえば、「タキトゥスの冒頭部分について」のなかでホブズは、属州にとって、党派対立の激しい共和政よりも、邪悪な君主による支配の方が望ましいと主張しました。また、コモンウェルスの「栄養と生殖」を扱った『リヴァイアサン』第24章では、植民はコモンウェルスの子

供であり、移民が定住した場合には、主権者への臣従を免除されたコモンウェルスとして自立するか、もしくは、ローマのように属州として本国との結びつきを保つとの見解が示されたのです。

本書の他の章でコーリ氏が議論しているように、ホッブズはキャベンディッシュの家庭教師としてイタリア旅行を経験するとともに、その一方では、ヴァージニア・カンパニーとも関わりを有していました。これらのことは、若きホッブズが見ていた世界が、イングランドという一つのリヴァイアサンのなかに狭く限定されないことを物語っています。現代のわれわれもまた、『市民論』や『リヴァイアサン』だけでなく、「三つの論考」（コーリ氏はこのイタリア語版を公刊）を新たに読むことを通じて、近代政治学や近代国家の歴史に還元されない、「マキアヴェッリ以上のマキアヴェッリ主義者」としての新たなホッブズ像や、あるいは古典古代を範型とする人文主義的な政治学の持続的な展開を知ることができるでしょう。その意味で、「三つの論考」のイタリア語訳も含む本書は、『ディスコルシ』と『リヴァイアサン』という「正典」の間にある、古典的な政治学と近代の政治科学の結節点を理解するために欠かせない、重要な研究成果なのです。

安武：すみません、時間が来ましたのでここで一旦締めさせていただきます。どうもありがとうございました。中途半端になりまして申し訳ありません。どうもご清聴ありがとうございました。